

2009 年度アジア・太平洋研究センター活動報告

アジア・太平洋研究センター主催講演会

日 時：2009 年 5 月 14 日 (木)

場 所：名古屋キャンパス J 棟 1 階 特別合同研究室

発表者：山下英愛 (立命館大学非常勤講師)

テーマ：「慰安婦」問題とナショナリズム

——「在日」アイデンティティの葛藤を通して——



- 1) ナショナル・アイデンティティの悩み
- 2) 韓国留学と「慰安婦」問題解決運動への参加
- 3) 運動の中で私が直面した二つの問題
- 4) 「慰安婦」問題とナショナリズム
- 5) ナショナル・アイデンティティの悩みからの脱却

第二次世界大戦中に日本軍が引き起こした「慰安婦」問題は、現在でも日韓間に溝をつくり、「和解」への道筋は見えない。この問題に韓国と日本で関わった山下英愛さんは、その活動の中で日本政府の理不尽さに憤りを新たにするとともに、韓国の活動家との認識の違いに「息苦しさ」を感じざるをえなかった。それは「在日」ゆえに感じる「違和感」だったのか。講演では「ナショナリズム」を越えて自分のアイデンティティの悩みから脱却を果たすまでの半生を語られた。

朝鮮半島出身の父親と日本人の母親との間に生まれた山下さんは、父親の姓を名

乗って朝鮮学校に通い、幼い頃から自分を朝鮮人と認識していた。しかし、小学校卒業の頃、自分が日本国籍であることを知り、アイデンティティに疑問を持つようになった。大学時代に戸籍名と朝鮮名を合体させて「やました・よんえ」という名前を名乗るようになり、卒業後はアイデンティティを「確認」するために韓国に留学した。民主化の気運の中で女性学の熱気があふれる時代に、ジェンダー研究で先駆的役割を担った梨花女子大学で学ぶという機会を得た。この頃新たに急展開した女性運動に啓発されるとともに、そこで学ぶ仲間たちとともに「慰安婦」問題にかかわるようになった。研究関心も植民地時代の公娼制度を掘り下げるなど、問題を歴史的に考察するようになった。

しかし、その中で、ナショナリズムの「壁」が、日本に限らず韓国でも人権問題を考える上でのひとつの大きな障害になることに気づいた。韓国の「慰安婦」問題解決に関わる活動家に共感しながらも、娼妓や芸妓の出身者が多かった日本人「慰安婦」を差別扱いすることに違和感を覚えた。それが「男性中心的な民族意識」に起因すると思われたからである。また、日本でも問題になった「国民基金」は、韓国の運動をさらに複雑にした。運動体はこれに対抗して募金活動を行なったが、「国民基金」を受け取った元「慰安婦」のハルモニを救済の対象からはずしたのである。運動は「被害者」の立場中心ではないように思えたが、同時にどうして韓国の活動家がそのように考えるのか、ナショナリズムの発露のあり方を理解しようとつとめた。

こうしてふたつの「祖国」の狭間で揺れ続けたが、最終的にはどちらの社会も国家、民族のあり方に問題があることを発見した。排除と差別を伴うような「国家」「民族」という概念は、選別された「国民」社会をつくりあげ、そこでの基本的人権は国籍重視を前提としている。ここに至って、ふたつの国の間でアイデンティティに悩むことがばからしくなった自分に気づいた。排除と差別に反対し、多様なアイデンティティ・存在を認める社会の構築に参加することこそが「自分らしさ」と確信することになった。

(文責：小林寧子)